

# 生涯音楽学習の学習動機となる要因が学習に及ぼす影響

別府 祐子

(本講座大学院博士課程前期在学)

## The Effects of Learning Motivation on Lifelong Learning of Music

Yuko BEPPU

### Abstract

The purpose of this study is to investigate factors that affect aggressiveness for the learning, intention to continue learning, and elevating spirit, and to investigate how those factors can influence lifelong music learning. A questionnaire is completed by people learn playing in chorus, playing *taisyogoto*, or wind instrument music. As the result of factor analysis, 7 factors that affect learning is found, as follows: “school education”, “finding value of learning”, “a sense that couldn’t learn music enough at school”, “competence”, “environment of learning”, “uneasiness about playing”, and “uneasiness about a sense belonging”. In addition, it is revealed that there are 3 orientations of learning as follows: purpose-in-life-orientation, participation-community-orientation, and music-activity-orientation. As a result of multiple regression analysis, it is shown that finding “value of learning” is one of important factor to promote lifelong learning of music. And for the person who learns with purpose-in-life-orientation or purpose-in-life-orientation, “environment of learning” has negative influence on elevating spirit. Additionally, it becomes clear that for the person learns with participation-community-orientation “uneasiness about playing” is a factor that disturbed aggressiveness for the learning.

### 1. 研究の目的と動機

生涯学習とは「各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法はこれを自ら選んで生涯を通して行うもの」<sup>1)</sup>と定義づけられ、生涯にわたってあらゆる機会にあらゆる場所において学習するものとされている。生涯にわたって学習に参加し続ける上で、重要であるのは、学習に積極的に取り組み、より高い目標をもち、それを達成することを繰り返すことであるといえる。

生涯音楽学習についての研究はこれまでに数多くなされているが、活動の実態調査をした研究が多く、学習動機に着目して研究されたものは少ない。また、生涯音楽学習の今日的課題は学習への参加を促進することにあるのではなく、学習の深化をどう促進するかということにある。そこで、本研究では、生涯音楽学習の学習動機となる要因を明らかにするとともに、それらが生涯音楽学習に対する取り組みにどのような影響を与えるのかを検討することを目的とする。

動機づけ研究において、行動指標として、行動の強さ、持続性、選択の3つが考えられてきた。速水(1998)は行動生起の時間的順序から捉えた動機づけの機能として、次の4つを挙げている。まず、第1段階は、行動を引き起こす「行動喚起機能」、第2段階は生じた行動を持続する「行動持続機能」、第3の段階は行動維持機能の中に含まれる「行動調整機能」、そして第4段階は行動持続機能に含まれる再度同じ行動を持続させる「行動強化機能」である。そしてこれらの機能と行動の3つの指標の関係について、「行動

喚起機能」は選択という行動に、「行動維持機能」は持続性にそれぞれ反映され、「行動調整機能」は行動の持続性や行動の強さに表出し、「行動強化機能」は、再び、選択に現れるとしている。

浅野（2002）は学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程を調査しているが、その中で、先の行動の3つの指標を用いている。選択を、学習行動を選択する「学習動機」、行動の強さを学習への積極的な関わりを表す「積極的関与」、持続性を将来にわたって学習をしようという「継続意思」とし、「学習動機」を含むどのような要因が、「積極的関与」および「継続意思」を促進するのかについて、検討している。

これを踏まえて本研究においても、行動の強さを「学習に対する積極性」、持続性を「学習を継続する意思」と置きかえる。しかし、選択は「学習動機」ではなく、「学習に対する向上心」と置きかえることとする。本研究では、すでに生涯音楽学習に参加している学習者の意識を測ることによって、生涯音楽学習の質的向上を促す要因について、重点的に検討していく。よって、選択を行動喚起機能として現れるものではなく、行動強化機能として現れるものを取り上げる。生涯音楽学習において、これら3つの指標を高めることがすなわち、学習の深化に通じるものとし、どのような要因がこれらを促進するのかを検討していく。

生涯音楽学習において学習の深化に関わる重要な側面として、学習者の学習の目的が関連していることが考えられる。丸林（1993）は「音楽学習はコミュニティ形成を視野に入れて成されるべき」としながらも「音楽学習が私的な趣味・教養の習得だけに終始してしまってはならないということ」を強調している。これをふまえて、学習者の学習の志向がある特定の志向に偏ることで、学習にどのような影響があるのかについて、本研究では、学習の志向性の違いによって、学習への取り組みにどのような差異があるのか、また、先の3つの指標に対して、学習動機となる要因が与える影響にどのような差異が生じるのかについても検討する。

生涯学習の場として提供されている音楽の分野は多岐にわたるが、本研究では合唱、吹奏楽・オーケストラ及び大正琴の3つの分野に着目した。この3分野に着目した理由は、3つの分野で、学習者のもつ学習志向が異なると考えられたためである。学習志向の違いには、学習を始める以前の音楽的知識や音楽的スキルが関わっていると考えられる。吹奏楽・オーケストラの活動に参加する者は、一般的に音楽的知識・スキル水準が高いと考えられる。大正琴は数字譜によって演奏できる楽器で、比較的容易であり、音楽的な知識や能力をもっていなくても、学習に参加することが可能である。合唱は、基本的には読譜の能力が必要ではあるものの、周囲の声に合わせて歌うこともできるので、必ずしも音楽的な知識や際立ったスキルが必要であるというわけではない。よって、合唱は他の二者の中間的な位置づけであることが考えられる。本研究は、学習参加の前の段階にあるこのような差異が、学習志向性に関わっていると仮定して行う。

## 2. 研究方法

### 2-1 調査対象

2006年12月に、合唱団体5団体、吹奏楽団体4団体、オーケストラ団体1団体および大正琴活動団体2団体に質問紙を配布した。合唱団体、吹奏楽団体、オーケストラ団体は郵送にて調査を依頼し、大正琴については、活動中に活動場所を訪問し質問紙を配布・回収した。その結果、合唱5団体から計133部、吹奏楽3団体から計60部、大正琴2団体から計85部を回収した。

### 2-2 質問紙

#### (1) 行動の指標

「学習に対する積極性」として、「現在の音楽活動に積極的に取り組んでいる」「意欲的に音楽を学んでいる」の2項目、「学習を継続する意思」として「現在の音楽活動をできるだけ長く続けたい」の1項目、「学習に対する向上心」として「もっと高いスキルを身に付けたい」の1項目を作成した。回答は5件法で求めた。以下の分析で、「学習に対する積極性」は2項目の平均値を下位尺度得点として使用した。

#### (2) 生涯音楽学習の学習動機となる要因

生涯音楽学習に参加している学習者の潜在的な意識を探るため、やりがい、音楽的な能力、活動の中における他者意識、音楽に対する興味関心、過去の音楽経験、学校教育での音楽経験などについて問うもの

を40項目設定した。回答は5件法で求めた。

### (3) 不安要因

学習する中で「友人関係」「指導者」「団体」「体力」「演奏技術の低下」「演奏技術の伸び悩み」について、どの程度不安を感じるか、5件法（1：非常に不安～5：まったく不安ではない）で回答を求めた。

### (4) 学習障害要因

どのようなことがらが学習者の学習を障害する要因となり得るのか、その傾向から、学習者の学習志向を測るために、「次のような事態になった時、どうしますか」という教示のもとに次の5つの事態が生じたときの対処を問う質問を設定した。「仲の良い友人がやめたら（以下、友人）」「今の指導者がやめて他の指導者になったら（以下、指導者）」「あなた自身が病気になったら（以下、自身の病気）」「あなたの家族が病気になったら（以下、家族の病気）」「団体がなくなってしまったら、他の団体に入っても活動を続けるか（以下、団体）」の5項目について、5件法（1：絶対にやめる、2：やめるかもしれない、3：どちらともいえない、4：たぶん続ける、5：絶対に続ける）で回答を求めた。

## 3. 結果と考察

### 3-1 尺度構成

生涯音楽学習に参加している学習者の潜在的な意識から、どのような要因が、生涯音楽学習という学習の学習動機となっているのか検討するため、質問紙項目の(2)生涯音楽学習の学習動機となる要因、40項目に対して因子分析を行った。主因子法による因子分析を行ったところ、固有値から、5因子構造が妥当であると判断された。そこで、再度、5因子を想定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.35以下の項目を除いて繰り返し分析を行い、最終的に36項目とした。その結果をTABLE 1に示す。

TABLE 1 学習動機となる要因の因子分析（主因子法・プロマックス解）の負荷量

項 目	I	II	III	IV	V
学校の音楽の授業に積極的に取り組んでいた。	.87	-.04	-.07	-.08	-.05
学校の音楽の授業は好きでしたか。	.80	-.13	-.03	-.06	.12
学校の音楽の授業で学んだことや経験は、現在の音楽活動につながっている。	.75	-.06	.20	-.11	.22
以前していた音楽に関する習い事は、現在の音楽活動につながっている。	.71	.03	.12	.01	-.05
楽譜を読むことができる。	.65	-.09	-.22	.10	-.08
今までに出会った音楽教師が印象に残っている。	.62	.10	-.03	-.02	.13
音楽が得意である。	.54	.18	-.11	.29	-.09
この活動以外で音楽に関わることがある。	.50	-.07	.05	.00	-.02
今の活動をする以前、音楽を通して強い感動を味わったことがあった。	.48	-.02	.13	.05	.05
音楽は好きですか。	.47	.26	.09	-.06	-.16
楽器あるいは歌の練習が好きですか。	.44	.34	.06	-.05	-.08
この活動の内容自体（声楽・合唱あるいは器楽・合奏）には興味がある。	-.02	.85	-.03	-.05	-.06
この活動はあなたにとって重要なものである。	.09	.81	-.09	-.08	-.01
現在の音楽活動は充実している。	-.06	.76	-.07	-.03	.23
現在の音楽活動はよい経験である。	-.03	.75	.03	.04	-.09
現在の活動にやりがいを感じている。	.00	.72	-.07	.03	.14
練習や努力がもっと必要である。	-.01	.62	.19	-.18	-.30
現在の音楽活動を通して人間関係が豊かになる。	-.07	.55	.08	.12	.14
現在の音楽活動の場の雰囲気を楽しむ。	-.06	.51	.03	.11	.28
学校の音楽の授業でもっと音楽理論が学びたかった。	.00	-.04	.87	.20	-.12
学校の音楽の授業でもっと音楽史が学びたかった。	.10	-.02	.79	.09	.03
学校の音楽の授業でもっと発声法を学びたかった。	.06	-.12	.78	-.02	.09
学校の音楽の授業でもっと楽器が弾けるようになりたかった。	.05	.05	.77	-.08	-.02
学校の音楽の授業でもっと視唱（五線譜を読んで歌うこと）を学びたかった。	-.31	.01	.72	.02	.04
学校の音楽の授業でもっと色々な曲を鑑賞したかった。	.22	.11	.59	-.05	.00
自分の能力や演奏技術は他人に認められている。	.05	-.15	.05	.85	-.02
あなた自身の演奏が、指導者にほめられることがある。	-.12	-.05	.16	.69	.03
団体の中の一員として周囲の人に認められている。	-.08	.22	.00	.68	-.04
自分の演奏能力や演奏技術に自信がある。	.13	-.01	-.09	.62	.06
無理なく声をだすことができる。/現在学んでいる楽器はどの程度弾くことができるか。	.10	-.06	.00	.61	.00
あなた自身の演奏が、共に活動している仲間にもめられることがある。	-.12	.00	.06	.42	-.05
現在の音楽活動は自分の実力に見合っている。	-.01	.35	-.05	.40	-.01
楽譜にある音を正しい音程で歌うことができる。/今習っている楽器を正しい指使いで弾くことができる。	.34	-.01	-.15	.40	-.08
この活動の練習内容には満足していますか。	-.02	-.03	.02	-.03	.89
この団体の構成員に満足していますか。	.10	.01	-.06	-.10	.80
現在の活動に満足していますか。	-.03	.15	.08	.09	.69
因子間相関	I	II	III	IV	V
I	—	.49	.31	.48	.04
II		—	.34	.45	.28
III			—	.12	.12
IV				—	.15
V					—

第1因子は、「学校の音楽の授業に積極的に取り組んでいた」「学校の音楽の授業は好きだった」などが高い負荷量を示していた。よって、これを「学校教育」因子と命名する。第2因子は、「この活動の内容自体に興味がある」「この活動はあなたにとって重要なものである」などが高い負荷量を示したので、これを「価値づけ」因子とした。第3因子は、学校の音楽の授業で学びたかったことで構成されているので、「学習不充足感」の因子とした。第4因子は、「自分の能力や演奏技術は他人に認められている」「あなた自身の演奏が、指導者にほめられることがある」が高い負荷量を示していたので、「有能感」の因子とした。第5因子は、「この活動の内容に満足していますか」「この団体の構成員に満足していますか」が高い負荷量を示しているため、「学習環境への満足感」の因子とした。以下の分析においては、各因子の因子負荷量の高い項目の平均値を下位尺度得点として使用する。また、各尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、「学校教育」は.87、「価値づけ」は.88、「学習不充足感」は.89、「有能感」は.76、「学習環境への満足感」は.85であった。

TABLE 2 不安要因の因子分析の(主因子法・プロマックス解)の負荷量

項目	I	II
演奏技術の低下	<b>1.02</b>	-.10
演奏技術の伸び悩み	<b>.85</b>	.05
体力	<b>.48</b>	.21
団体	.03	<b>.84</b>
友人関係	.00	<b>.66</b>
因子間相関		
	I	II
I	—	.43
II		—

示していたので、これを「集団帰属意識不安」因子とした。以下の分析においては、各因子の因子負荷量の高い項目の平均値を下位尺度得点として使用する。それぞれの $\alpha$ 係数は「演奏不安」が.83、「集団帰属意識不安」が.71であった。

### 3-2 学習内容別の特徴

行動の指標である「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」「学習に対する向上心」、学習動機と

TABLE 3 学習内容ごとの平均値・標準偏差と多重比較の結果

	1 合唱	2 大正琴	3 吹奏楽	F 値	多重比較の 結果
学習に対する積極性	4.00 (0.90)	3.81 (0.78)	4.03 (0.76)	1.43	
学習に対する向上心	3.54 (0.99)	3.36 (0.92)	4.39 (0.64)	24.38***	3>1, 3>2
学習を継続する意思	4.25 (0.72)	4.24 (0.63)	4.42 (0.65)	1.58	
学校教育	3.88 (0.70)	3.44 (0.77)	3.92 (0.47)	8.87***	1>2, 3>2
価値づけ	4.13 (0.59)	4.14 (0.51)	4.38 (0.47)	4.33*	3>1
学習不充足感	3.49 (0.81)	3.63 (0.79)	3.35 (0.71)	1.97	
有能感	3.29 (0.65)	3.24 (0.60)	3.22 (0.53)	0.21	
学習環境への満足感	4.20 (0.56)	4.12 (0.62)	3.82 (0.65)	7.93***	1>3, 2>3
演奏不安	2.63 (0.84)	2.79 (0.83)	3.32 (0.81)	13.54***	3>1, 3>2
集団帰属意識不安	1.90 (0.73)	1.94 (0.77)	2.18 (0.75)	2.88	

( )内は標準偏差 \*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

次に、学習において学習者が抱える不安が学習にどのように影響するのかについて検討するために学習不安要因尺度を作成した。質問紙項目の(3)不安要因、5項目をすべて逆転項目として使用した。5項目について、主因子法による因子分析を行った結果、固有値から2因子構造であることが明らかとなったため、再度2因子を仮定して主因子法、プロマックス回転にて因子分析を行った。結果をTABLE 2に示す。

第1因子は、「演奏技術の低下」「演奏技術の伸び悩み」「体力」が高い負荷量を示していたので、「演奏不安」因子とした。第2因子は、「団体」「友人関係」が高い負荷量を

示していたので、「学習に対する向上心」「学校教育」「価値づけ」「学習環境への満足感」及び「不安要因尺度」「演奏不安」「集団帰属意識不安」が、生涯音楽学習の学習内容3分野でどのように異なるのかについて検討するために、一要因分散分析を行った。多重比較検定はBonferroni法を用いた。その結果をTABLE 3に示す。

群間差は、「学習に対する向上心」「学校教育」「価値づけ」「学習環境への満足感」「演奏不安」で有意であった。「学習に対する向上心」及び「演奏不安」は吹奏楽が合唱及び大正琴よりも有意に高く、「学

習環境への満足感」は吹奏楽が有意に低かった。このことから、吹奏楽に参加する者は単なる技術の習得を目的としているのではなく、現状に満足することなく、よりよい演奏技能を習得することを目指していることが示された。また、「学校教育」は、大正琴が他の2分野よりも有意に低い。大正琴学習者は、学校教育の段階では、十分に音楽的能力の形成することができず、また、現行の学習指導要領でいうところの「音楽を愛好する心情」も十分に育成されていない傾向にあると考えられる。

### 3-3 学習内容と学習志向の傾向

学習内容ごとに特徴的な学習志向を検討するために、(4) 学習阻害要因の5項目を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、「指導者」「自身の病気」「団体」の3項目において、群間差がみられた。Bonferroni法による多重比較の結果をTABLE 4に示す。「指導者」は大正琴が合唱および吹奏楽よりも有意に低く、また、「自身の病気」「団体」は大正琴が、吹奏楽よりも有意に低かった。このことから、音楽経験に乏しい大正琴学習者にとって、独学で学習することは困難であり、指導者の存在は不可欠であるということが示唆されたが、学習志向に関して、3つの分野で異なる特徴的な傾向は見いだされなかった。

TABLE 4 学習内容ごとの各阻害要因の平均値・標準偏差と多重比較の結果

	1 合唱	2 大正琴	3 吹奏楽	F 値	多重比較の結果
友人	3.93 (0.79)	3.97 (0.74)	4.18 (0.77)	2.21	
家族の病気	3.59 (0.88)	3.14 (0.91)	3.85 (0.71)	12.37***	1>2, 3>2
団体	2.73 (0.99)	2.53 (0.98)	3.05 (1.02)	4.75**	3>2
指導者	2.85 (0.92)	2.74 (0.83)	2.83 (0.89)	0.37	
自身の病気	2.89 (0.99)	2.73 (1.00)	3.23 (0.95)	4.60*	3>2

( ) 内は標準偏差 \*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

### 3-4 学習志向

3-3の結果から、学習志向は学習内容によって異なる傾向がみられるのではなく、学習者個人としての特性が強いことが考えられた。そこで、学習者がどのような学習志向を持っているのかその傾向を分類するために、全学習者を対象として、(4) 学習阻害要因、5項目を用いて、Ward法によるクラスター分析を行った。その結果、3つのクラスターを得た。第1クラスターは101名、第2クラスターには81名、

TABLE 5 学習志向ごとの各阻害要因の平均値・標準偏差と多重比較の結果

	1 生きがい	2 コミュニティ参加	3 音楽活動	F 値	多重比較の結果
友人	4.44 (0.54)	3.44 (0.84)	4.02 (0.54)	51.92***	1>3>2
家族の病気	4.11 (0.55)	2.84 (0.84)	3.38 (0.74)	73.59***	1>3>2
団体	3.44 (0.74)	2.27 (1.01)	2.18 (0.61)	65.80***	1>2, 1>3
指導者	3.38 (0.75)	2.33 (0.85)	2.51 (0.59)	50.90***	1>2, 1>3
自身の病気	3.48 (0.77)	1.83 (0.61)	3.40 (0.49)	166.98***	1>2, 3>

( ) 内は標準偏差 \*\*\* $p < .001$

第3クラスターには65名が含まれた。各群の特徴について把握するために、得られた3クラスターを独立変数、学習阻害要因を従属変数として、分散分析を行った。その結果、全ての項目において有意な群間差が認められた。Bonferroni法による多重比較の結果をTABLE 5に示す。第1クラスターは、5項目のうち、「友人」「指導者」「自身の病気」「家族の病気」の4項目が、他の2クラスターよりも有意に高かった。あらゆる阻害要因に対して、学習を続ける意識を強くもっている群である。さらに、自分や家族の病気に対しても学習活動を優先させたいという意思も、もっており、学習活動自体が生活をする上で力の源になっていると考えられる。したがって、第1クラスターを「生きがい志向」群とする。第2クラスターは、「友人」「指導者」「団体」の3項目が、第3クラスターよりも有意に低いことから、この群に属する学習者は、学習活動をとおして、集団のなかで、友人や指導者と交流することを重要視していると考えられる。つまり、

コミュニティに参加することに学習活動の意義を感じている群なので、「コミュニティ参加志向」群とする。第3クラスターは、「コミュニティ参加志向」群との比較から、所属する団体とともに学習する仲間には特にこだわらず、自身の音楽的欲求を満たすために学習している傾向が強いと考えられる。したがって、第3クラスターを「音楽活動志向」群とする。

各群と3分野の学習内容とのクロス集計の結果をTABLE 6に示す。この結果からも、学習志向は、学習内容ごとに、特に顕著な傾向はみられないことが示された。

TABLE 6 各学習志向と活動内容

	生きがい	コミュニティ参加	音楽活動	合計
合唱	49 43.75%	38 33.93%	25 22.32%	112 100.00%
大正琴	23 29.87%	30 38.96%	24 31.17%	77 100.00%
吹奏楽	25 43.10%	24 41.38%	16 27.59%	58 100.00%

### 3-5 各学習志向の特徴

3つの学習志向型を独立変数とし、生涯音楽学習の3側面である「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」「学習に対する向上心」、学習動機となる要因である「学校教育」「価値づけ」「学習不充足感」「有能感」「学習環境への満足感」、及び不安要因である「集団帰属意識不安」「演奏不安」を従属変数として1元配置の分散分析及びBonferroni法による多重比較検定を行った。その結果をTABLE 7に示す。

分析の結果「学習環境への満足感」を除いて群間差が認められた。生涯音楽学習の3側面のうちの「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」および学習動機の要因である「価値づけ」は生きがい志向群が他の2群よりも有意に高く、これは、学習の価値を内在化した結果、生きがいとして捉えていることを証明し得る当然の結果といえる。「学習に対する向上心」はコミュニティ参加志向群が、他の2群よりも有意に低く、音楽的欲求の差が改めて示された結果となった。また、「学校教育」「学習不充足感」「有能感」がコミュニティ参加志向群よりも生きがい志向群が有意に高かった。生きがい志向群は、学校音楽教育に積極的に取り組み、ある程度のことを学んで身につけているが、さらに学びたいという知的好奇心から生涯音楽学習を行っていると考えられる。そして知的好奇心から生じる様々な問題を自ら解決していく過程で、有能感を得ることができて生きがいへとつながっていると考えられる。

不安要因尺度で、集団帰属意識不安が、コミュニティ参加志向群で生きがい志向群よりも有意に高いことが示されことは当然の結果といえるが、「演奏不安」で音楽活動志向群だけでなくコミュニティ参加志

TABLE 7 学習志向ごとの平均値・標準偏差と多重比較の結果

	1 生きがい	2 コミュニティ参加	3 音楽活動	F 値	多重比較の結果
学習に対する積極性	4.27 (0.61)	3.65 (0.95)	3.81 (0.82)	13.94***	1>2, 1>3
学習に対する向上心	4.03 (0.90)	3.25 (1.01)	3.79 (0.77)	15.59***	1>2, 3>2
学習を継続する意思	4.54 (0.54)	4.05 (0.80)	4.24 (0.43)	13.64***	1>2, 1>3
学校教育	3.96 (0.53)	3.53 (0.83)	3.72 (0.65)	6.35**	1>2
価値づけ	4.43 (0.44)	3.98 (0.68)	4.11 (0.38)	14.89***	1>2, 1>3
学習不充足感	3.66 (0.76)	3.23 (0.75)	3.47 (0.80)	6.04**	1>2
有能感	3.43 (0.57)	3.04 (0.62)	3.26 (0.57)	7.86**	1>2
学習環境への満足感	4.11 (0.63)	4.12 (0.59)	4.02 (0.64)	0.53	
演奏不安	2.59 (0.78)	3.08 (0.94)	2.99 (0.85)	7.90***	2>1, 3>1
集団帰属意識不安	1.79 (0.64)	2.16 (0.85)	2.04 (0.72)	5.81**	2>1

( ) は標準偏差 \*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$

向群も、生きがい志向群よりも有意に高いことは特筆すべきである。コミュニティ参加を目的としていても、演奏技能が伴わないことが、学習の重大な弊害となり得るということが示された。

### 3-6 学習動機となる要因及び不安要因が学習に与える影響

学習動機となる要因及び不安要因が、学習をどのように促進するのかについて検討するために、「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」「学習に対する向上心」のそれぞれを従属変数、学習動機となる要因の尺度、及び学習における不安要因尺度を説明変数として重回帰分析を行った。また、学習志向の違いが、どう影響するのかについて見いだすために、学習志向群ごとに分析した。各標準偏回帰係数をTABLE 8に示す。

一部において有意性が見られないが、どの群においても「価値づけ」「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」「学習に対する向上心」のいずれかには、強い正の影響を与えている。生涯音楽学習を促進するうえで、「価値づけ」が重要な役割を担うことが明らかとなった。

生きがい志向群は、「価値づけ」が「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」に有意な正の影響を与えていた。この群にとって、生涯学習として音楽を学ぶことの総合的な価値を内在化させることは、積極的に取り組み、その状態を維持することへとつながるが、それだけでは向上心は促進されないことが示された。さらに「学習環境への満足感」が「学習に対する向上心」に有意な負の影響を与えていた。このことに関しては、個人の目的意識や目標意識と、集団の中の他者あるいは集団そのもののそれとのギャップが関係していると考えられる。生きがい志向群は、生涯音楽学習に知的的好奇心をもって取り組み、様々な欲求を満たすことで、それが活力となっている。しかし、集団全てがそのような高い意識をもっているわけではないので、その意識のギャップが原因で欲求が満たされない事態が生じたときには、行動は強化されないということではないだろうか。

コミュニティ参加志向群では、「価値づけ」がすべての側面に有意な正の影響を与えていた。また同群では、「演奏不安」が「学習に対する積極性」に有意な負の影響を与えていた。学習志向別の特徴についての分析結果から、コミュニティ参加志向群にとって、演奏技能が伴わないことが、学習の重大な弊害となり得ることが明らかになったが、本分析の結果から、演奏技能が伴わないことが、特に積極性の促進の弊害となる可能性があることが示された。また、「学校教育」が「学習に対する向上心」に対し、有意な正の影響を与えていた。学校音楽教育において、「音楽ができる・わかるようになる」ということに対して、よい印象を享受していたことが、もっと高い技能を身につけたいという考えへとつながっていると考えられる。

音楽活動志向群は、「価値づけ」が「学習に対する積極性」及び「学習に対する向上心」に対して、有意な正の影響を与えていた。また、「学習環境」が「学習に対する向上心」に有意な負の影響を及ぼしている。これについては、この群の特徴を考慮すると、アンサンブルとして演奏の完成度をどこまで求めるのかということ個人と集団で認識が異なっていたり、他のメンバーとの演奏レベルのギャップを感じたりすることが、向上心を妨げる要因となると考えることができる。

TABLE 8 重回帰分析結果

目的変数	学習に対する積極性			学習を継続する意思			学習に対する向上心		
	生きがい	コミュニティ参加	音楽活動	生きがい	コミュニティ参加	音楽活動	生きがい	コミュニティ参加	音楽活動
学校教育	.06	.16	.24	.05	.03	.04	.15	.36**	-.17
価値づけ	.63***	.71***	.48**	.52***	.62***	.38	.25	.50**	.58**
学習不充足感	.13	-.07	-.02	.14	.08	-.11	.04	-.06	.26
有能感	-.01	.07	-.05	.12	-.05	.10	.15	.19	-.01
学習環境への満足感	.10	.08	.20	-.13	.06	-.06	-.45**	-.16	-.44**
演奏不安	-.18	-.26**	.03	-.06	.00	-.10	.11	-.11	.08
集団帰属意識不安	.12	.14	.06	-.07	-.07	.12	-.10	.15	.23
R <sup>2</sup>	.63***	.68***	.46**	.40***	.49***	.20	.28**	.56***	.31*

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

#### 4. まとめと今後の課題

本研究の結果、学習志向の違いは、音楽の知識や技能の差の結果として学習内容ごとの特徴に現れるのではなく、個人の特性として現れることが明らかとなった。つまり、同じ学習者集団の中に、異なる学習志向をもつ者が混在しているということである。そのような状況では、指導者は、学習者が何を求めているのか、どう支援していけばよいのかということ、集団として把握するのではなく、個人についてそれぞれ把握し、適切な支援をしていく必要がある。

生きがい志向群の学習への取り組みは、まさに生涯音楽学習の理想の形であるといえる。しかし、その学習をより高めるということについては、周囲との意識の差が弊害となる可能性がある。また、音楽活動志向群においても、他者との意識の差が、個人の学習の向上を妨げることが示された。目的や目標意識に大きな差異がある中で、それにどう対応していくのかということが、生涯音楽学習の重要な課題の1つであるといえる。

また、コミュニティ参加志向群では、「演奏不安」が、学習に対して消極的になってしまうことへとつながることが示された。Ryan & Deci (2000) は、人間の心理的欲求として、「関係性への欲求」「有能さへの欲求」「自律性への欲求」の3つを仮定し、これらが満たされることで、人間は自己実現が可能であるとしている。コミュニティ参加によって、関係性への欲求を満たすことは可能であるが、そこに、演奏技能が伴わないと有能性への欲求を満たすことができない。また、周囲との関係を保つための学習では自律性も促進されない。学習をスタートさせるきっかけとしてコミュニティ参加は非常に重要な要因であるが、それだけでは、学習を始めてからの動機づけは強化されず、学習を通して自己実現を図ることはできないということが改めて示された。

本研究では、学習動機となる要因及び不安要因が、学習をどのように促進するのかについて検討するために、重回帰分析を行ったが、7つの下位尺度のうち有意性が見られたものは、各分析につき、1つ、ないしは2つであった。また  $R^2$  の値も低く、精度がいいとはいえない。これについて、考えられる可能性は次の2点である。1つは、学習に影響を与える要因が他にもあるということである。もう1つは、「価値づけ」は、「学習に対する積極性」「学習を継続する意思」「学習に対する向上心」に直接的に影響するけれども、それ以外の要因は「価値づけ」を介して間接的に影響するという可能性である。要因を再検討するとともに、他の手法により分析を行うことで、構造を明らかにすることを、今後の検討課題とする。

#### 註

1) 中央教育審議会 (1981) 「生涯教育について (答申)」 (昭和 56 年 6 月 11 日) による。

#### 引用文献

- ・浅野志津子 (2002) 「学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程 —放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から—」『教育心理学研究』50, pp.141-151
- ・速水敏彦 (1998) 『自己形成の心理—自律的動機づけ』金子書房
- ・丸林実千代 (1993) 「生涯学習社会における音楽活動の機会提供はどうあるべきか—「コミュニティ形成」を目指した音楽学習の事例の検討を通して」『音楽教育学』23(2), pp.36-39
- ・Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000) “Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being”, *American Psychologist*, 55, pp.68-78.